法匠会報

法政大学 デザイン工学部 建築学科 同窓会会報

第48号 2014年3月31日

発行所 〒184-8584
東京都小金井市梶野町 3-7-2
振替口座 00110-5-89264
TEL・FAX（042）387—6385
法政大学デザイン工学部建築学科同窓会
発行人 岡本 眞
編集人 会報編集委員会

建築学科同窓会—理系同窓会—校友会

この春、現校友連合会は一般社団法人法政大学校友会に引き継がれます。そして都道府県各単位に統合された地域校友会、付属校同窓会、各部活OB会、職域別の同窓会、会社内同窓会、そして各学部同窓会など全ての法政大学関連OB、OGの団体がこの校友会の組織団体に所属する事となります。

■大学の生き残りとして

受験生の確保の一つとして卒業生組織の充実が挙げられています。冒頭に述べましたが、全法政OB、OGを結集する組織として校友連合会のテコ入れを大学は6～7年前より行ってきました。H25年度卒業生より卒業時終身会費として3万円を大学が代理徴収し、この4月1日にスタートする法人化した校友会に納入されます。

この新卒業生は全員同期会として校友会の会員になります。ですから毎年同期会ができあがり現在校友連合会会員は約5000名と言われています。一気に倍増していくわけですが、会費収入の大半は校友会館建設に向けられていく様です。その議論はさておき、我が母校存続躍進のため大学の校格を上げる事には卒業生としての皆さんも同じ気持ちではないでしょうか。

■理系同窓会の運営

いまさらですが、建築同窓会は前工学部同窓会に所属し機械、電気、土木、経営工と共に活動してきました。大学改革により工学部が理工学部とデザイン工学部に分かれ建築学、都市環境デザイン工学（土木）そしてシステムデザイン学の3科が市ヶ谷田町に移り、その他の学科は理工学部で小金井校舎に残り小金井には新たに情報科学部、生命科学部が創設されました。理系同窓会はこれら4学部からなっています。ですから各学科同窓会の皆様から集めた会費は理系同窓会に収められた現在4000円/年会費の20%が各学科の運営費になっています。事務局は小金井校舎にあり専従事務員1名と大学先生（ボランティア）の事務局が会員住所管理、学科同窓会よりの要望、問題提起の把握を行い執行部は各学科より選出の会員で活動しています。

■校友会会員へのお誘い

われわれ建築学科同窓会の会員の皆様に毎年4000円/年とは別に是非校友会終身会費3万円の協力をお願いします。終身ですので1回で終わりです。（また支払方法分割あり、下記へ連絡ください。）

■新制校友会の活動

学生への援助の充実、卒業生組織への還付、スポーツへの助成、校友会館の設置が挙げられています。今後は二重構造の会費が少しでも解消するよう働きかけていきます。

又昨年末の総長選に田中優子現社会学部長が立候補され当選されました。同窓生でもあり新しい法政を期待します。

校友会を育てる中で建築同窓会も発展していく事と信じます。

法政大学建築学科同窓会
会長 岡本 眞（1970年卒）

問い合わせ先：法政大学校友連合会事務局
TEL 03-3264-1831 FAX 03-3264-4770

同窓会会費について

現在理系同窓会の学科組織として傘下に建築学科同窓会はいます。デザイン工学部建築学科に大学組織は変わりましたが、同窓会はそれにとらわれることなく理系同窓会の行方を見守っていきたいと考えています。会費は今年より4,000円もしくは永久会員（事務局へお尋ねください）として登録お願いします。

そしてこの法匠会報は理系同窓会報発行にあわせ郵送してます。理系同窓会報は第79号より会費納入者のみに配布となっております。同窓の皆様からのご浄財で成り立っていますのでご協力お願いします。

理系同窓会事務局 TEL/FAX 042-387-6385

第9回 大江宏賞

2012年度、第9回大江宏賞公開講評審査会は2013年3月30日（土）、市ヶ谷田町、デザイン工学部のマルチメディアホールで行われました。審査対象は大学院修了にあたり修士設計を提出した51名のなかから建築学科教員による学科審査で推薦された6作品でした。一人ひとりのプレゼンテーションでは、審査員からの厳しい質問や鋭い指摘があり、さらに休憩時間には会場外のホールにて模型を前に発表者と審査員、聴衆との意見交換も活発に行われていました。

投票の結果、渡辺苗子さんの『地に経つ建築——石巻市荻浜における震災復興提案——』が大半の審査員の高い評価を得て今回の大江宏賞受賞作品となりました。それは被災した人々との現地での交流のなかから得られた復興への意気込みを海辺の地場産業、漁業の再生と新たな街、建築の創生に結び付けようと挑んだ作品でした。今回の審査員は、学外特別審査員・新谷眞人、飯田善彦、赤坂喜顕の建築家3氏、OB審査員として塩田能也（1984年卒）、白川在（2001年卒）、小堀哲夫（1997年卒）の3名および坂本一成大学院客員教授の7名でした。渡辺苗子さんには受賞メダルと賞金30万円がそれぞれ坂本教授と大江宏賞運営委員会会長猪野忍より手渡されました。

第9回大江宏賞の審査会場風景、渡辺苗子作品の詳細、候補6作品タイトルは建築同窓会のホームページのなか、「大江宏賞」に掲載されていますのでご覧ください。

▼建築同窓会URLは▼
http://www.hosei-archi-ob.sakura.ne.jp/ohe_award/

猪野忍（1966年卒）

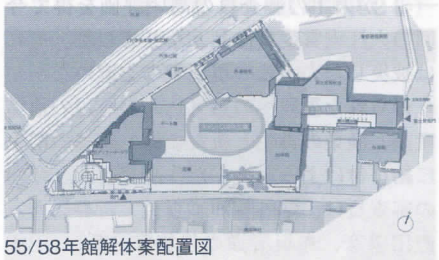
55/58年館を未来にとどけるために

昨年2013年は大江宏生誕100年にあたりさまざまなイベントが開催されました。その年に55/58年館の解体への具体工程が大学より発表されるという、あまりにも無配慮なタイミングの告知は、文化とはほど遠い無味乾燥な未来の風景にたいする警鐘としてひびきます。

■示された解体案

2013年７月に大学より告知された55/58年館の建替工事の内容は予想以上に悲惨なものであった。現在の引きのある風景ではない、現外濠校舎と同等なヴォリュームが外濠の通りを圧するように建ち並ぶ。現在の55/58年館が解体され、キャンパス中央に虚しく広がる空地が出来上がる。キャンパス中央の背骨のごとき重要な動線でもあった55/58年館が消去した空間は、まさに骨抜きの状態となっている。露わになることを意識されていない80年館と、免罪符のごとく55/58年館のファサードをなぞった新館（南館）にかこまれた虚空は市ヶ谷キャンパスの爆心地そのもののようだ。誰がなにをよりよくしようとしているのだろう？巨費を投じて環境を改悪しようとしているとしか、わたしには思えない。

その工事工程が12月に示された。2014年3月着工、2016年８月/2019年１月にそれぞれ新館2棟が竣工、その後現55/58年館の解体工事に着手、2021年１月に全体の工事完了という工程が学内広報誌により周知された。慙愧に堪えぬ思いが、この工程を書きながらこみあげてくる。



55/58年館解体案配置図

■顔なき事業者

2010年の夏、2003年来凍結されていたはずの「市ヶ谷再開発計画」（すなわち55/58年館解体建替え）が動き始めたという報を受けた。世界を破壊し焼き払った『風の谷のナウシカ』の巨神兵の如くに、誰がなんの目的でそうなったのかはわからないままに、その計画はよみがえってしまった。この計画の不気味さは、事業決定についての責任者が不在であることにある。

2011年２月、55/58年館の保存再生の要望を提示した各団体に対して、A4一枚の回答書が法政大学より増田総長名で送られた。この公式回答をもとに、再度、55/58年館解体の理由を考える。

回答書には、大学運営中枢にてすでに決定された意志であることが記され「時代の要請に応える教育環境の整備と安全性の確保」「都心キャンパスにおける敷地的制約」のふたつの理由が記されていた。だが、それらはどのように考えても55/58年館リノベーション案で解決可能な事象であろう。決定の束縛から出ることなく思考停止している大学の意志が、未来を閉ざしているに過ぎない。顔をもたない事業推進者は、異議申し立てをしたどの団体に対しても対話をすることなく、この重要な問題を公開し叡智を拾い集める手続を示さないままに現在に至っている。

■公の資産を失うダーツ遊び

『レンブラントでダーツ遊びとは』という本がある。たとえばレンブラントの絵の所有者がその絵を標的にしてダーツ遊びをやったとしても、なんら法律にもとることはないし、私的な束縛を受けることもない。だが、それでよいのか？文化的遺産と公の権利の問題を検証し文化の共有を鋭く問う。いま市ヶ谷キャンパスで起ころうとしていることは、まさにこの事象なのだ。55/58年館という建築は、法政大学の文化的表象であるばかりでなく、日本の学校建築における唯一無二の存在である。

法学として著名なこの問題を、「日本近代法の父」ボアソナードはどのように眺め判断するのであろうか。少なくとも所有者の見識が問われることは間違いがないだろう。法政大学は、今まさにレンブラントを標的としてダーツ遊びに興じようとしている。しかも、言い出しっぺの顔の見えないままに。

■新しい建築との対話

魅かれる先達にはまさに今すぐ、より多くの話を聞きたい知りたいと思う。インタビューし業績に触れそれらを記録し多くの人に伝えるカタチにする。55/58年館に対する、そんな活動も始まっている。その行為の動機は、けっして対話する先達の死を欲することではないのと同じように、今しかできない会話を楽しもうとしていることにあるように思う。ファサードにプロジェクトマッピングを試み、55/58年館の設計周辺のことを調べ、あるいは建物に向かい合って実測し記録する。1995年、53年館と第2-58年館をなくしたとき（あるいは2004年に学生会館を失ったとき）にはできなかった営為が、くったくなく胎動している。地道にも思える、だけれど地に足の着いた建築とのあらたな対話の仕方。意志ある個々の人間が自らできることを考え、やりたいことを探す。この先にダーツを取り上げることのできる世界があるのかもしれない。

■未来に向けて

前号の2013年３月発行の法匠会報には、田中優子社会学部教授より寄稿いただいている。「55/58年館が無くなって、ボアソナードタワーのようなビルが高低ばらばらに林立する法政大学を思い浮かべてください。大学なのか企業なのかわからないその場所が、実に寂しいです。」と綴られていた。コマーシャリズム（あるいは金融資本主義）のビル形状に酷似する新しい校舎群に固有の文化に根差した校舎が駆逐されつつある現況を、平易な文体で鋭く訴えている。その田中教授がおよそ1500人の大学教職員による選挙で選出され、2014年４月から法政大学の総長になられる。新しい大学の顔となった田中総長は、けっして55/58年館の喪失を望んではおられまい。江戸の美学が「粋」にあるとするならば、ぜひとも総長の粋な計らいで、55/58年館のリノベーションへと舵を切ってほしい。

町場の建設現場では、着工してからも工事中断・中止となる事例はさほど珍しい出来事ではない。未来にとってほんとうに豊かな選択の道はまだ閉ざされてはいない。55/58年館の存在を生かして未来を切り開くキャンパス（法政大学の器）とすることはできる。たとえば、時間をかけて大学の成長戦略を練れば、隣の逓信病院とうまく協働することで、文化財たり得る55/58年館を生かしながら大学の新しい風景を創出することも可能だろう。未来のためにでき得ることをやり続ける2014年にしたい。

法政大学55/58年館の再生を望む会代表
岡崎浩司（1987年修士了）

55年館エントランス　（撮影：小川重雄）

アーカイブ作業　参加者募集のお知らせ

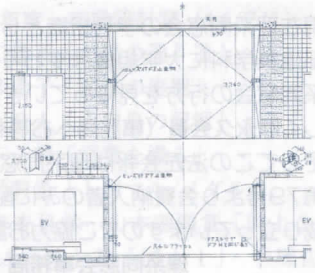
55/58年館アーカイブのための実測スケッチ作業に参加していただける方を募集します。

昨年発表された工程では、今年３月の55年館エントランスの解体を皮切りに、約７年をかけて段階的に解体工事が実施されます。無くなってしまう前に記録し、資料を未来に残さなければならないと考えた建築学科関係者が集まって「法政大学55/58年館アーカイブワーキンググループ」を立ち上げました。「55/58年館の再生を望む会」とは別のグループとして、少しずつアーカイブをまとめていきたいと考えています。まず始めに現況を測量し、現存する図面との食い違いを正す作業を行うことにしました。また、その実測データをスケッチにまとめ、「55/58年館実測スケッチ集」作成を目指しています。

55/58年館の実測スケッチ作業に興味がある方がいらっしゃいましたら、下記のアドレスに御連絡お願いします。多くの方の御参加をお待ちしております。

連絡先
メール：tasten@happy.odn.ne.jp
TEL：03-5684-8490

55/58AWG 阿部智樹（1994年修士了）



55/58年館　実測図

法匠女性ネットワーク

■小金井市小金井総合体育館の見学会

2013年３月31日（日）永瀬克己先生設計の小金井総合体育館の見学会を行いました。

楕円、三角、四角から構成された体育館、満開の桜が映る曲面のガラスのアプローチ、近頃はガラスに映る姿を観ながら、ダンスに興じる若者が多いと聞きました。体育館の見学会はとても寒い日でしたが、頭上の満開の桜の下での永瀬先生の説明が思い出されます。心より哀悼の意を表します。

■梅若能楽学院会館・能鑑賞と見学

2013年９月15日（日）大江宏先生設計の梅若能楽学院会館で能鑑賞を通して能楽堂の見学をしました。他の能楽堂にはみられない自然光が舞台に直接入り、時間の経過と共にかもし出す陰影が舞台を盛り上げていました。当日は低気圧の影響で天気の移り変わりが多く、物語の流れと同じように物寂しさや、暖かなやさしい光が舞台を創っていました。

■奈良旅行

2013年11月22（金）～23日（土）彫刻家・観光大使の坂口紀代美さんの案内で奈良へ見学旅行に行きました。

川口衛先生ご紹介の坂口さんはとてもチャーミングな人で旧知の間柄のように解けこみとても楽しい２日間でした。

坂口さんのお骨折りで大江宏先生設計の中宮寺誕生仏御厨子の見学が可能になり、小春日和のおだやかな朝、法隆寺駅に集合しました。

御厨子はとても洗練され美しい佇まいでした。川合玉堂、福田平八郎、横山大観等一流の芸術家による天井絵、工芸が素晴らしく、皆無言で眺めていました。その後、弥勒菩薩にお会いし、法隆寺、薬師寺東塔の解体修理の現場見学、唐招提寺、川口先生のパンタドーム（百年会館）等を見学し、奈良での至福の２日間が終りました。

訃報

法政大学建築学科の永瀬克己教授が昨年12月30日の夜に脳梗塞のため急逝されました。葬儀は本年１月４日（通夜）および５日（告別式）の２日間に渡り執り行われました。

永瀬先生は亡くなる前々日まで沖縄方面に出張されるなど、正月を前にして忙しく過ごしていらしたとのことですが、30日に体調を崩され、容体が深刻であったため救急車で病院に搬送されました。病院において緊急手術が行われ、一旦は話しができる状態であったようですが、深夜11時前に容体が急変し、他界されました。享年68歳でした。

永瀬先生は若い頃から建築のみならず書画や工芸などにも持ち前の卓越した発想力とデザイン力を発揮され、建築教育を通してこれまで多くの学生に影響を与えられました。また、永瀬先生はそのお人柄から多くの方々に慕われ、その業績をもって信頼され、建築学科の卒業生にとってもその姿は目標でもありました。これからまだまだ活躍されるお歳でありながら急逝されたことは、誠に残念なことです。ここにこれまでの感謝の意をこめて、心より哀悼の意を表します。

中屋伸茂（1973年卒）

■佐々木宏先生と長沢浄水場見学

佐々木宏「近代建築講義」は昨年９月で全６回が終了し、教科書に載っていない近代建築等についてお聞きする事が出来た。

その後先生に東京及び近郊の近代建築10作品等を選んでいただき、10月に品川の「原美術館（旧原邸）」＝1938年（渡辺仁設計）、目黒の「聖アンセルモ・カトリック目黒教会」＝1956年（アントニン・レーモンド設計）を見学した後、先生と川崎市生田の「東京都水道局長沢浄水場」を見学した。浄水場は生田の高台（海抜76.5m）に在り、相模川水系の水を浄化して自然流下で多摩川を横断して都内に給水されている。

建物は山田守の設計で1957年に完成。特徴はフラットスラブを支えるマッシュルームコラム。特に約110mの操作廊の２列に並ぶ白く塗装されたコラムは美しく、その先端、外部２本のコラムは建設当時の本実型枠打ち放しのままで残されている。2003年DOCOMOMO100選への選定を受けて2007年山田守建築事務所によって耐震改修工事がなされた。　梅松市彦（1966年卒）

第17回　法匠展　開催のお知らせ

法匠展は今年で第17回目を迎えます。

会場を「エコギャラリー新宿」に移し、2014年６月12日～17日に開催されます。

この展覧会は法政大学の建築同窓生・在校生・先生方が、日常の設計活動などから離れ、趣味の創作活動の成果を持ち寄りながら交流を図ろうと、建築学科50周年を記念して企画され、毎年、回を重ねてまいりました。

昨年の第16回法匠展は総勢46名が参加し、絵画・陶芸・書・写真・楽器制作・立体等多様な作品が会場を彩りました。前回も永瀬ゼミの学生さん達による多数の若々しい陶芸作品が出展され、賑やかな華やぎを添えました。

法匠展は先生方、学生、同窓生達が展示作業やオープニングパーティー、会期中の出会いを通して、世代を超えて楽しい時間を共有する「交流の場」となっています。

恒例となった大江宏賞受賞作品（大学院修士設計最優秀賞）の特別展示には、渡辺苗子さんによる社会性に富んだ『地に経つ建築―石巻市荻浜における震災復興提案―』が出展されました。また、ギャラリートークは自作のチェロを出展された朝吹正行さんに製作秘話と生演奏をご披露頂き、闊達な質疑も交わされて、誠に楽しいイベントとなりました。

今年度より、会場を緑豊かな新宿中央公園内にある「エコギャラリー新宿」に移しての開催となります。法政大学田町校舎にも近く、交通の便も良いほか、会場の広さもこれまでの倍となり、ゆとりある豊かな展示が期待されます。多くの皆様のお気軽なご参加を心よりお待ち申し上げております！申込み詳細は建築同窓会のホームページをご覧ください。

小川かよ子（1967年卒）

同窓会ホームページとメールマガジンのご案内

同窓会のホームページは、同窓会の行事、卒業生の活躍、学校の行事などリアルタイムで更新しています。ぜひ、時々覗いて見て下さい。

又、毎月25日にメールマガジンを発行しています。メールマガジンの購読は同窓会ホームページから簡単に出来ます。登録はもちろん無料。

OB、OGのリレーエッセイも好評です。エッセイも皆さんから随時募集していますので、ぜひお送り下さい。

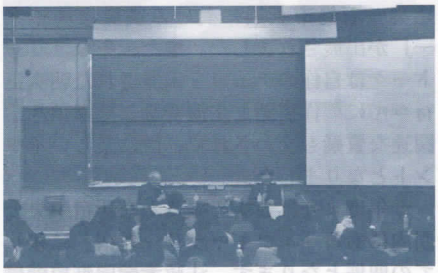
同窓会ホームページのURLは、http://www.hosei-archi-ob.sakura.ne.jp/です。

建築フォーラム

法政大学デザイン工学部の公開授業「建築フォーラム2013」が2013年11月12日から12月21日までの計８回に渡って開催され、会場は毎回、本学学生や学外からの聴講者で盛況しました。今年度は、テーマを「モダニズムをめぐって」とし、富永譲先生、陣内秀信先生、妹島和世先生、佐々木睦朗先生、坂本一成先生、渡辺真理先生、隈研吾先生、伊東豊雄先生の８人に講演して頂きました。各回の講師の方には「私にとってのモダニズム」というキーワードのもと、幼少時代、学生時代から、いま現在までの来歴とモダニズムを関係づけたお話を伺うとともに、各講師と富永先生とのトークセッションにより、講演内容を深めた議論を展開して頂きました。

建築家、建築史家、構造家とそれぞれ分野、作風は違うが、先生方の幼少期から学生時代、青年時代に至るまでの原風景、影響を受けた本、先生、時代背景、様々な要素が現在の自身の建築観のベースとなっていることが共通して語られ、大変興味深く感じました。そして、質疑応答などでたびたび話題に上ったのは、建築や都市を実際に見てスケール感や素材感を養ってほしいということでした。この建築フォーラムを契機としてこれから様々な建築や都市に触れ、自身の建築観を作り上げていけたらよいと思います。

林泰寛（博士後期課程２年）



朴賛弼先生の展覧会・講演。論文集

2013年２月26日～３月13日まで、駐大阪韓国文化院ミリネギャラリーにて、歴史と環境都市への挑戦「清渓川写真・図面展覧会」が開催された。ソウル清渓川の歴史、復元前後の姿、周辺の景観を時系列に撮影したパネル写真、清渓川全長12kmに及ぶオリジナル立面図及び図面パネル、更に配置図が展示されて壮観でした。また朴先生が2002年から2012年までに行った主な研究成果をまとめた「私の足跡」855頁に及ぶ論文集（縮刷版）が発刊されました。

大江宏生誕百年記念事業

2013年は，法政大学建築学科の礎を築かれた大江宏先生（1913～1989年，法政大学名誉教授）の生誕百年の年にあたる。建築学科ではこれを記念し，「大江宏生誕百年記念事業〈大江宏・考〉アーカイヴ展・特別講演会」を昨年11月に開催した。本事業は，建築学科教授陣と大江新氏で構成された記念事業企画委員会と，筆者を含め有志数名で立ち上げた大江宏研究会との協働で進められた。「アーカイヴ展」（2013年11月９日～23日）は，大江宏先生の卒業設計と卒業論文，また自筆による国立能楽堂のスケッチや歴史地図など，初公開となる資料を中心に展示した。「特別講演会」（11月16日）は，建築家・磯崎新氏と，建築史家・中川武氏のお二人を講師としてお迎えし，それぞれ「正統としての堂・祠・居」，「方法としての〈歴史意匠〉の可能性」と題された講演が行われた。講演後には陣内秀信教授を加えた鼎談も行われた。来場者数は会場定員を大幅に上回る350名にのぼるほどの盛況であった。

石井翔大（博士後期課程２年）

安藤直見先生、グッドデザイン賞受賞

デュアルコアハウス［二子新地の家］、北面以外は隣地に接する幅約５メートル×奥行約10メートルの敷地に，２棟のタワーを配置し，その間にテラス＋階段室（外部空間）を設けている。すべての部屋は，この外部空間を挟んで独立・分散している。家族形態の主流が大家族から核家族に変化している現在、家族がゆるやかに分裂しながら住宅を共有し，また，それぞれが個々に社会（外部）との接点をもつことを目指している。

新任に岡本哲志教授

岡本哲志

専門は都市形成史。

東京は学生時代から研究の対象としており、主に、深川、日本橋、丸の内、銀座がフィールドです。

20年ほど前からは、豊かな空間をつくりあげた歴史のある全国の港町・漁村を調査研究してきています。陸からの発想では、不便で、過疎化・少子化の最前線です。近い将来、日本の都市や町が縮小化を迫られる時代。より本質的な都市や集落のあり方を探るために、強大な地震に見舞われた三陸沿岸の港町・漁村を現在精力的に調査研究を進めています。

写真:石巻市雄勝町大須浜（撮影：鈴木知之）

新任に赤松佳珠子准教授

（あかまつかずこ・Kazuko Akamatsu）

1990年日本女子大学家政学部住居学科卒業後シーラカンス（のちＣ＋Ａ、CAt）に加わる。2002年～パートナー。2013年～法政大学デザイン工学部建築学科准教授。

国内外で家具・住宅から公共建築まで、様々なプロジェクトを手掛ける。代表作品は宇土市立宇土小学校、柿畑のサンクンハウス、他。村野藤吾賞、日本建築学会作品選奨、AACA賞(日本建築美術工芸協会賞)、日本インテリアデザイナー協会賞大賞など。様々なフルイド（流動的要素）を通して、新しい時代に向けての建築空間の在り方をさぐっていきます。

建築学科卒業設計公開講評会開催

2012年度　卒業設計賞（13/2/2）

１手塚健太「児童空間のマチエール」
２南　由佳「だんだんと」
３丹澤直人「里程標のある道」
４真島嵩啓「失ったもの/繋がっているもの」
５高槻友哉「坂の屋根の町」
特別審査員賞・内藤廣賞「同上３」・貝島桃代賞「同上４」・西田司賞「同上１」

2013年度　卒業設計賞（14/2/1）

１山口雄司「お湯の通り道」
２林沙希子「記憶の集塊」
３久保公人「人口島の記憶」
４藤下　彩「言葉を織る」
５奥村彩希「トドマル/メグル」
特別審査員賞・山本理顕賞「同上２」・ヨコミゾマコト賞「同上１」・手塚由比賞「山口亜弓―芸術家の卵のための寄宿村」

第３回大江宏賞を受賞した金田真聡君の「金田真聡のドイツ・ベルリン建築通信」をぜひHPで愛読ください。